



筑紫女学園大学リポジット

Problems of the Use of Kamishibai in Childcare : Analysis of the Experiences of Childcare Students Using Kamishibai

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大元, 千種, OHMOTO, Chigusa メールアドレス: 所属: |
| URL | https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/36 |

保育現場における紙芝居の活用の課題

—保育学生の紙芝居経験を手掛かりとして—

大 元 千 種

Problems of the Use of Kamishibai in Childcare

— Analysis of the Experiences of Childcare Students Using Kamishibai —

Chigusa OHMOTO

1. 研究の問題と目的

紙芝居は、日本独自の児童文化であり、戦前戦後を通じて保育や教育に活用されてきた。紙芝居の持つ大衆への感化力の強さについては、街頭紙芝居として平絵の紙芝居当時から評価が高く、キリスト教の布教や戦時下における国策としても利用された歴史がある（加太, 2004 ; 鬢櫛・種市, 2005）。

紙芝居の原型は寄席で演じられていた影絵や写し絵で、1869（明治2）年頃流行し、1889（明治22）年頃写し絵から立ち絵に変わり、見世物としての街頭芸となっていく。それが現在の平絵の紙芝居になるのは、1930（昭和5）年頃である。第一作は「お伽の御殿」（作：後藤時蔵／画：永松武雄）とされ、飴売りの行商人の考案による（鈴木, 2005）。飴を売って紙芝居を見せることから街頭紙芝居は「飴売紙芝居」、「三文飴屋」などとも呼ばれた。当時の紙芝居の代表作である『黄金バット』（作：鈴木一郎／画：永松武雄、1932（昭和7）年から画：加太こうじ）の人気とともに紙芝居は全国に普及していく。大衆への紙芝居の影響力は大きく、戦時中軍部にも利用されていくこととなる（下川, 2002 ; 鈴木, 2005 ; 昭和館, 2012）。

当時子どもたちを魅了した街頭紙芝居の持つおもしろさについて、鈴木（2005）は、以下のよう
にまとめている。①紙芝居のストーリーのおもしろさ、②紙芝居屋の語りのおもしろさ、③紙芝居屋のおじさんの人間味、④貧乏人の心の通い合いの場、⑤仲間うちの協働体験の場、である（鈴木, 2005, p.10）。このように、紙芝居が子どもたちを魅了するのは、作品がおもしろいからだけでなく、そこに集う仲間としての一体感や、通い合いをもたらし場となっているからである。さらに「子どもたちのやじ、茶々入れ、突っ込み、ませ返し（カタク言えば劇評です）」（鈴木, 2007, p.2）が紙芝居を成立させるとも言われ、紙芝居屋と観客である子どもたちとの双方向的なやりとりこそが紙芝居の醍醐味であると言える。

紙芝居と教育や保育との関係を見ると、街頭紙芝居は子ども相手に水飴や駄菓子を売ることと抱き合わせられたものであることや作品の低俗性から、非教育的であるという偏見が教育界には強くあった。それにも関わらず、倉橋惣三は1930（昭和5）年頃から保育教材・教具として高く評価し

ており、実際の保育でも昭和7、8年頃から「幼稚園令」の「保育項目」の「談話」の応用として使われるようになっていった（日本保育学会, 1971）。それには、従来とは異なる倉橋の「保育項目」観が影響していると、鬢櫛・種市（2006）は考察している。すなわち、それまでの「教える」保育ではなく、子どもの自由な遊びから保育内容をとらえ、子どもから生じる興味をすでにある文化財を用いて充足させ、そこに保育内容が存在するという保育項目のとらえ方である。倉橋は、街頭で子どもたちを魅了する「立ち絵」や「かがみ」と言われる当時の紙芝居の仕組みに興味を持つようになり、保育教材としての紙芝居の意味を見出したのである。

また、今井よねによるキリスト教伝道への活用の他、高橋五山が立ち上げた全甲社による教育紙芝居や仏教紙芝居など、紙芝居は様々な教育場面で活用されていた。戦時中には、紙芝居は効果的な教育手段として集団疎開でも積極的に利用されるようになる（鈴木, 2005；昭和館, 2012）。そのため、戦後、紙芝居はGHQからの検閲を受けることとなったほどである（山本, 2000）。

戦後の保育界では、紙芝居の教育効果に対する評価は高く、『保育要領—幼児教育の手引き—』（1948）において、紙芝居が保育教材・教具として保育制度的に初めて位置づけられることとなる。

高度経済成長期には街頭紙芝居が全盛期を迎え、子どもたちには身近な文化財となっていた。しかし、TVの普及から、紙芝居は子どもたちの日常生活から次第に距離をおくようになる。さらには、1967（昭和42）年度から実施の文部省「第一次教材整備10カ年計画」により、学校教材としての紙芝居が学校から締め出され、紙芝居は保育教材が中心となってきた経緯がある（土地, 1997）。2008年改訂の幼稚園教育要領および保育所保育指針では、「言葉」の内容として「絵本や物語など」という表記になっているが、保育現場では紙芝居も教材として活用されている。

以上のように、現在の保育現場において紙芝居は重要な位置づけがされている。確かに保育教材としての紙芝居は、駄菓子とセットで演じられていたかつての街頭紙芝居の内容や演じ方とは異なっているが、紙芝居の演劇性や大衆性という本質は変わらない魅力を持っている。しかしながら、その紙芝居の本質が生かされるのは、紙芝居の内容はもちろんであるが、演じ手、すなわち読み手次第である。保育の場では保育者の紙芝居に対する理解と力量が問われる。

さらに、紙芝居の魅力は、以下の条件が備わっているからこそ引き出されるものである。まつい（2006）によれば、紙芝居の備えている「形式」が紙芝居の「特性」を引き出し、観客を魅了する。紙芝居の「形式」とは、「画面をぬく」、「ぬいた画面をさしこむ」、「演じ手と観客が向かい合う」という紙芝居を演じる際に必要とされる行為である。その「形式」は紙芝居の「舞台」を使うことによりいっそう生かされるとされる。すなわち、舞台を使うことで、紙芝居の特性として「作品の世界が現実空間に『出ていき広がる』」、「集中とコミュニケーションによって、作品世界への演じ手と観客相互の『共感』が生まれる」、「観客が共感によって作品の世界を自分自身のものにしていくことができる」という一連の流れが引き起こされるのである。このように、舞台の使用は紙芝居の本質である演劇性や大衆性と関係しているのである。

ところが、鬢櫛・野崎（2010a）によれば、保育現場において紙芝居で舞台をいつも使用されている幼稚園や保育所はわずか6.8%で、ほとんど使用しないも含めて使用しない園は79.1%である。舞台を持っている園が少ないことや、持っても園に1～2台という事情から舞台の使用ができ

にくくなっている可能性がある。さらに紙芝居が演じられる時間帯は「お帰りの時間」が最も多い時間となっている。保護者のお迎えや園バスの乗車待ちの時間に子どもを集中させることや、場つなぎとして使われているようである。これらの点から見ても、紙芝居の持つ形式や魅力を保育現場では十分に生かし切れていないことが推測できる。

本研究では、保育者養成課程の学生を手がかりとして、子ども時代や実習先での経験から保育現場の紙芝居の位置づけを把握し、紙芝居を演じる上での課題を検討したい。

2. 研究の方法

(1) 調査対象

福岡県下のC女子大学保育士課程在学中の保育実習Ⅰ（保育所、児童福祉施設）を終えた3年生31名、保育実習Ⅰおよび保育実習Ⅱ（保育所）または保育実習Ⅲ（児童福祉施設）を終えた4年生21名、計52名である。

(2) 調査方法とその内容

以下の内容について、質問紙による調査を実施した。

- ①子ども時代の紙芝居の経験の有無について質問をした。
- ②保育実習中の紙芝居の経験の有無について質問をした。
 - ・保育者が実施していたか。
 - ・本人が実施したか。
- ③経験のあった者には、保育者と本人実施のそれぞれの場合について以下の質問をした。
 - ・紙芝居の実施対象年齢と人数。
 - ・紙芝居が実施されていた時間帯。
 - ・紙芝居の内容（記憶している限りで）。
 - ・紙芝居の舞台の使用の有無。
 - ・紙芝居と絵本の読み聞かせとの実施の比較。
- ④本人が実施した場合さらに以下の質問をした。
 - ・演じる場合何に気を使ったか。
 - ・絵本の読み聞かせと比べてのやりやすさ。
 - ・紙芝居と絵本の使い分けについて。
- ⑤紙芝居の思い出について自由記述を求めた。

(3) 調査の手順

3年生には授業を利用し、4年生には発表会の練習時を利用して質問紙を配布、回収した。回答は強制ではなく任意協力による。さらに必要に応じて、学生から聞き取りができるように、記名を依頼したが、分析上個人が特定されないよう配慮した。

(4) 調査期間

調査は、3年生に対しては2011年12月20日、4年生には2011年12月23日に実施された。

3. 結果と考察

(1) 子ども時代の紙芝居の思い出

図1、図2に示すように、子ども時代の紙芝居経験は小学校時代が多いが(46名、53.5%)、学校で見たという者は33名である。一方、図書館や文庫での経験をあげている者が21名いることから、小学生になると学校外の経験も多くなることがわかる。それに対して就学前の経験は40名(46.5%)で、場所も家か、保育所または幼稚園という保育現場であった。就学前の子どもが紙芝居に接する場は生活行動上からも限定されている。なお、街頭紙芝居の経験者は1名であった。

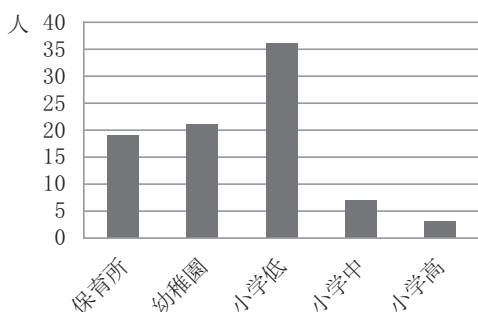


図1 子ども時代の紙芝居経験

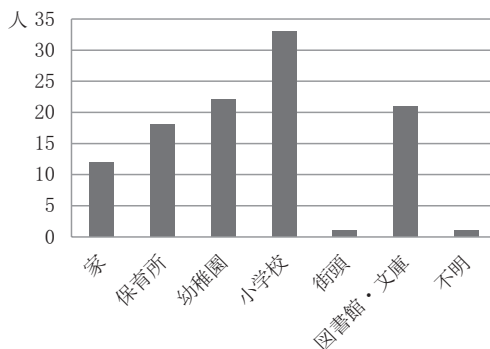


図2 子ども時代の紙芝居経験の場所

紙芝居を特徴づける道具として舞台がある。子ども時代の経験でいつも舞台を使用されていたと記憶する者は少ないが、図書館や文庫で使用されていた記憶が比較的多かった(8名)。一方保育所と幼稚園での舞台の使用は7名であるが、使用されていなかったという者も11名おり、舞台の取り扱いには保育現場による違いが見られた。

紙芝居の思い出についての自由記述は少なく、15件であった。そのうち「幼児期の思い出が出てこない」、「なにもなし」という2件以外の13件をまとめたものが表1である。

紙芝居は「特別な時間、場所で読まれることが多かった」ことから「特別感があった」という記憶や、その「特別感」から紙芝居に「ワクワクした」思い出がある学生がいた。小学生の頃の思い出も「お話の部屋みたいなどころによく聞きに行っていました」や「何かの行事がある時に紙芝居があった」というように特別な時間、特別な場所と相まって紙芝居が記憶されていた。特別な時間に特別な場所での紙芝居というところからも、紙芝居に対する非日常的な楽しみが感じ取られる。

また、紙芝居の「絵の迫力」や「場面展開」、「めくり方」に絵本との違いを見て、紙芝居の魅力を感じている学生もいる。絵本との比較で紙芝居の特徴をとらえているようであるが、紙芝居が「芝居」のゆえんでもある「絵」の力と場面展開やめくり方、すなわち画面のぬき方に目をとめている。

表1 子ども時代の紙芝居の思い出（自由記述）

-
- ・特別感（絵本よりも）があったと思う。
 - ・紙芝居は特別な時間、場所で読まれることが多かったので、「特別」がとても楽しみでワクワクしていた。また、次のページに行く時に、一気にめくるのではなく、読みながら徐々にめくっていたので、物語が繋がっているようで楽しかった。
 - ・場面転換があってももしろい
 - ・絵本よりも絵が大きかったりめくり方が違っていたりして興味をひいた。
 - ・紙芝居の方が絵に迫力があるから好きだった記憶があります。
 - ・家で寝る前にお母さんが本棚から取り出して、みんなでパーッと集まって、みんな真剣に聞いていた思い出があります。
 - ・私が保育園の頃は延長保育の先生のみが演じていました。昼間の保育士はまったく紙芝居をやっていませんでした。これは確かです。
 - ・小学生の頃に図書館へ行って、木の枠を使って妹に読んであげていた。
 - ・小学校くらいしか覚えていないけど、何かの行事がある時に紙芝居があっていたと思う。
 - ・小学校のお話の部屋みたいなどころによく聞きに行っていました。
 - ・小学校のときにうまい人が来てくれた。
 - ・小学校の図書の先生の読み方が上手だった。
 - ・小学生のときに上級生のお兄さんが昼休みの時間を使って、絵本を読み聞かせしてくれた。
-

「家で寝る前にお母さんが本棚から取り出して、みんなでパーッと集まって、みんな真剣に聞いていた思い出」は、家庭での母親やきょうだい、家族との幸せな思い出になっているようである。また、「小学生の頃に図書館へ行って、木の枠を使って妹に読んであげていた」という者もいた。姉が幼い妹に紙芝居を読んであげている姿が目浮かぶようであるが、読んでもらう妹も読み手である自分にとっても楽しい思い出となっていることが読み取れる。それらは、幼稚園や保育所、学校で読んでもらった紙芝居とは違った紙芝居の良い記憶となっている。

「小学校の図書の先生の読み方が上手だった」も「小学校のときにうまい人が来てくれた」も読み手の上手さから紙芝居の世界を楽しんだ思い出となっており、やはり読み手、すなわち紙芝居の演じ手の力量も紙芝居の魅力と関わっていると言える。しかし、紙芝居ではないが、小学校時代の「上級生のお兄さんが昼休みの時間を使って、絵本を読み聞かせしてくれた」では、お兄さんは決して上手くはなかったであろうが、上級生が読んでくれたという嬉しさや幸せ感のほうが強に残っていたと推測できる。

紙芝居は必ず読み手、すなわち演じ手があってこそ成立する。もちろん、絵本の読み聞かせの場合も読み手と聞き手との関係があるが、絵本は一人でも楽しむことができるものである。しかし、紙芝居は一人読みが前提とされておらず、むしろ集団が意識されて作られている。必ずそこに観衆が想定され、演じ手としての読み手が存在しなければならない。そこが絵本とは根本的に異なるところである。演じ手も聞き手とのコミュニケーションをはかりながら紙芝居を演じていくので、演じ手としても聞き手に楽しんでもらうことが喜びであり、聞き手も自分たちのために演じ手が演じてくれ、紙芝居をみんなで共感し合えるという幸せ感に紙芝居の醍醐味がある。

学生たちの数少ない子ども時代の紙芝居の思い出の中からも、これらの紙芝居のもつ特長と楽しさを読み取ることができる。

(2) 実習先での紙芝居の経験

1) 実習先保育者による紙芝居の実施

保育実習先で保育者による紙芝居経験があった学生は39名（75.0%）である。3回の保育実習での延べ人数は51名となるが、それらの経験のほとんどが保育所実習であった（図3）。なお、本来紙芝居は芝居なので、「演じる」という表現がふさわしいのであるが、学生の回答が「演じる」でなく「読む」という表現であることから、本稿では、保育現場の紙芝居については、「読む」あるいは「実施する」という表現にする。

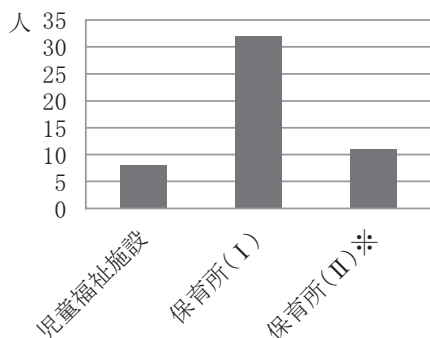


図3 紙芝居実施の実習先
（※のみ21名中）

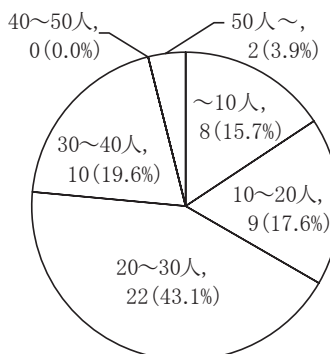


図4 保育者による紙芝居の対象人数

紙芝居の対象数は、図4に示すように、約20~30人が多く、22名（43.1%）であったが、そのうちでも20人対象が19名ともっとも多かった。20人以上では34名（66.7%）、50人以上も2名おり、集団保育の場ならではの大人数を対象にしている。一方、10人以下も8名（15.7%）あり、そのうち2人や3人という少人数を対象にして紙芝居が実施されていた。5人以下は保育所ではなく児童福祉施設での実施であり、乳児院や児童福祉施設の幼児クラスなど保育所に比べて少人数であったことによる。

また、実習先での紙芝居と絵本の読み聞かせの実施（延べ人数68名）についての比較では、図5に示すように、絵本の読み聞かせのほうが多い（66.2%）と感じている学生が多かった。しかし、同じくらいと感じた学生も17.6%おり、紙芝居のほうが多かったという学生も16.2%いる。保育の現場では絵本の読み聞かせが一般的によくされているが、紙芝居も多く実施されている。

紙芝居が実施されていた保育場面は、図6に示すように、④活動の合間がもっとも多く（18名）、次いで⑦夕方のお迎え前（15名）、⑤昼食やおやつ前後（13名）となっており、③メインの課題活動は4件であった。このように、保育のメインとしての紙芝居の位置づけは弱い。舞台も92%で使用されていなかった。

保育の場での紙芝居は、日常の活動の中に埋もれており、活動と活動の間隙の時間を埋めることや、次の活動への時間つなぎ、または子どもたちの気持ちを落ち着かせ次の活動へ気持ちを切り替えるために使われていた。学生たちが子ども時代に感じていた紙芝居の「特別感」をもたらすような扱われかたではないことがうかがえる。

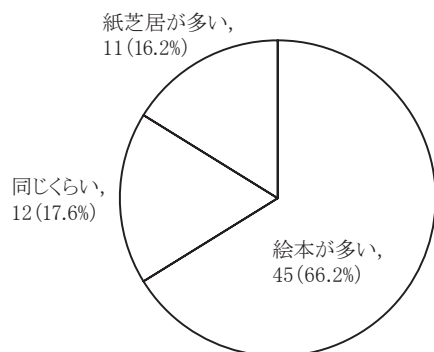


図5 実習先での絵本と紙芝居実施状況

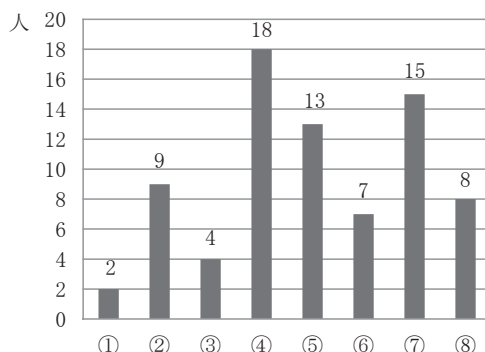


図6 保育者が紙芝居を実施した保育場面

項目：①朝の自由遊び、②朝の集まり、③メインの課題活動、
④活動の合間、⑤昼食やおやつ前後、⑥午睡前か後、
⑦夕方のお迎え前、⑧延長保育

2) 学生による紙芝居の実演経験

実習先で紙芝居を実施した学生は32名（61.5%）で、一度も実施しなかった学生は20名（38.5%）であった。なお、3回の実習での延べ実施人数は37名である。

学生が紙芝居を実施した対象年齢は、4歳児が一番多く10名であり、次に3歳児8名、5歳児7名、2歳児と7歳児が各1名でであったが、同年齢でなく、異年齢の子どもたちを対象にも行っていた。異年齢児の場合、0～5歳児（1名）や、1～6歳児（1名）、2～5歳児（3名）のように3歳未満児と3歳以上児を一緒にした広い年齢幅の子どもたちに実施した場合もあった。3～4歳児（2名）、3～5歳児（1名）、4～5歳児（1名）と幼児を対象とした場合もあるが、0～2歳児（1名）、1～2歳（1名）のように未満児だけを対象とした場合もあった。

対象人数は、図7に示したとおりであるが、20～30人を対象にした学生が14名（38%）と多く、20人以上は23名（62.1%）であった。50人以上も2名いたが、そのうち100人が1名いた。一方で10人以下の学生も5名おり、そのうち3名は施設実習の場で、2人や4人を対象に紙芝居を実施し

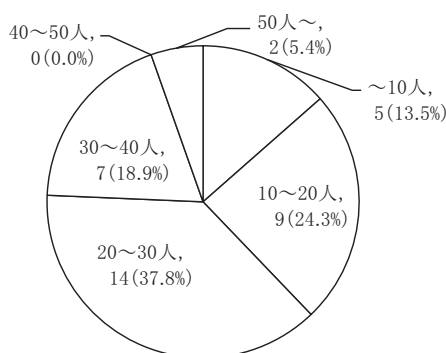


図7 学生が紙芝居を実施した対象人数

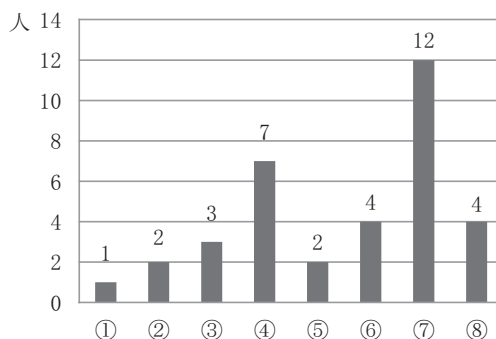


図8 学生が紙芝居を実施した保育場面

項目：①朝の自由遊び、②朝の集まり、③メインの課題活動、
④活動の合間、⑤昼食やおやつ前後、⑥午睡前か後、
⑦夕方のお迎え前、⑧延長保育

ていた。

紙芝居を実施した保育場面は、図8のとおりである。学生が実施した場面と保育者が実施した場面と比較したものが表2である。学生も保育者とはほぼ同様な場面で紙芝居を実施しているが、保育者が最も多く実施していたのが④活動の合間（保23.7%、学20.0%）であったのに対し、学生は、⑦夕方のお迎え前での実施（保19.7%、学34.3%）が多くなっていた。また、②朝の集まりは、保育者が11.8%であったのに対し、学生は5.7%とさほど実施していない。その反対に、保育者が低い実施率（5.3%）であった③メインの課題活動は、学生が8.6%実施しており、紙芝居を主活動（設定保育）に位置付けた学生もいた。実習生は何をするにも担任からの許可が必要であり、指示された場面や時間を使って行うために、保育者とは異なった時間帯になっていると考えられる。

表2 学生の実施場面と保育者の実施場面

| 保育場面 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | 計 |
|---------|-----|------|-----|------|------|------|------|------|----|
| 学生の実施数 | 1 | 2 | 3 | 7 | 2 | 4 | 12 | 4 | 35 |
| % | 2.9 | 5.7 | 8.6 | 20.0 | 5.7 | 11.4 | 34.3 | 11.4 | |
| 保育者の実施数 | 2 | 9 | 4 | 18 | 13 | 7 | 15 | 8 | 76 |
| % | 2.6 | 11.8 | 5.3 | 23.7 | 17.1 | 9.2 | 19.7 | 10.5 | |

学生が紙芝居を実施した際に配慮したこと（複数回答）は、図9に示したとおりである。発音や声の大きさが最多で20名（46.5%）、次いで場面の送り方が13名（30.2%）、持ち方9名（20.9%）で、立ち位置に配慮した者は1名（2.3%）であった。

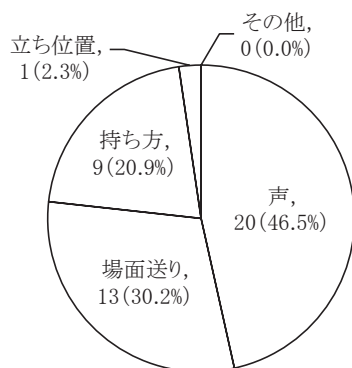


図9 紙芝居を演じる時気をつけたこと

紙芝居と絵本の読み聞かせとを比較してどちらがやりやすいかを尋ねたところ、絵本の読み聞かせのほうが紙芝居に比べてやりやすいという学生が12名で、紙芝居のほうを選択した学生は7名、どちらも言えないが5名であった。その理由を表3に示した。

絵本の読み聞かせのほうがやりやすいという理由が、「紙芝居の持ちにくさ」、「場面の送りにくさ」や「子どもの顔や表情の見えにくさ」にあることがわかる。それは、「舞台があったらやりやすかったかもしれない」という回答もあったように、学生が紙芝居を実施する際に舞台を使用して

いなかったことにも原因があると言える。つまり舞台を使わず、顔を紙芝居の後ろに隠して読むからである。紙芝居を実施した学生の舞台使用はゼロであったことから、紙芝居を絵本と同じように片手で持つと不安定なために画面がぐらつき、両手で持つと画面をぬくことができにくくなる。また、絵本とは違うという意識が働くのか、紙芝居の画面の後ろに顔を隠して読んだという学生もいた。そうすると子どもの表情を見ることができない。すなわち、紙芝居を演じる際の基本的な形式がとられていなかったが故の紙芝居のやりにくさであった。

反対に、紙芝居のほうがやりやすいという学生は、「話すときに見せやすい」、「文字が読みやすい」、「絵も大きくて見やすい」という理由があった。学生のなかには「舞台があるので絵がぶれることがない」という者もいたが、実習中には舞台を使用したという回答はなく、その学生は「自分が好きだから」とも書いているので、実習以外の場での経験の可能性はある。一方、「持ち手や立ち位置を絵本よりは気にしなかったから」という理由は、必ずしも舞台を使用しての意見ではなく、文字通り「気にしない」で実施したと推測できる。この学生は読んだ紙芝居のタイトルを記憶していないが、登場人物に「おじいさん」、「恐竜」、「カメレオン」が出てくるものと回答している。つまり、子どもの興味を引き付ける昔話や生き物などの内容であったと考えられる。紙芝居の持っている作品の力で子どもからの良い反応を得られたので、「紙芝居のほうがやりやすい」と感じる事ができたと考えられる。

表3 紙芝居と絵本の読み聞かせとのやりやすさの比較

| | |
|--------------|---|
| 絵本のほうがやりやすい | <ul style="list-style-type: none"> ・場面送りが大変 ・紙芝居はめくり方が難しい(3) ・慣れているし、ページをめくりやすい ・(絵本が)持ちやすい ・(紙芝居は)持ちにくいから ・絵本のほうが持ちやすいし表情が読み取りやすい ・(絵本は)見せやすいし指しやすい ・紙芝居は持つときにゆれるので、読みにくかった ・紙芝居は顔がみえなくて、難しかった ・舞台があったらやりやすかったかもしれない |
| 紙芝居のほうがやりやすい | <ul style="list-style-type: none"> ・舞台があるので、絵がぶれることもないし、自分が好きだから ・話すときに見せやすい ・文字が読みやすいし、絵が大きくてわかりやすいから ・持ち手や立ち位置を絵本よりは気にしなかったから ・絵が大きくて見やすい ・読みやすい |
| どちらとも言えない | <ul style="list-style-type: none"> ・どちらも難しい ・どちらにも方法がそれぞれあると思うから選べない ・どちらも同じくらい難しい |

紙芝居と絵本の読み聞かせとは、保育の場で使い分けをしたほうが良いという意見が、17名おり、使い分けをする必要はないと考える9名のほぼ2倍であった。どちらとも言えないという学生は15

名であったが、保育現場での紙芝居や絵本の読み聞かせの経験の少なさから判断つきかねるところがあると考えられる。

紙芝居と絵本の使い分けの意見は、表4に示すとおりである。学生自身の数少ない紙芝居経験ではあるが、紙芝居か絵本かという二者択一的選択ではなく、両方を適宜使い分ける「人数や場所によって使い分けた方が良い」という意見が多かった。すなわち、人数が多い場合や、部屋が広い場合には紙芝居が適しており、少人数で部屋が広くない場合は絵本が適しているということである。また、紙芝居のほうが子どもたちが引き込まれやすいため「難しい内容は紙芝居」という意見や、紙芝居は、「全員そろって、ちょっと落ち着かせたい場面」や「ちょっと特別なときに使った方がいい」など紙芝居の特徴をとらえた意見もあった。「絵本ばかりの物語ではなく、紙芝居の存在を子どもたちに知らせるためにも使いたい」、「面白いものなので、実習の時にできたらいいな」と積極的に紙芝居を活用したいという意見もあった。その一方で、「あまり紙芝居と接していないので、よくわからないが」という前提で、紙芝居が絵だけであることから「教材として絵本を使っても良いのではないか」という声もあった。絵本は家庭でも保育現場でも多く取り入れられ、学生にとっては子どもの頃から親しんできた教材である。さらに絵本の教育的効果についても一般的に知られている。他方、舞台を使わない紙芝居は持ちにくく、画面のぬき方が難しく、子どもの表情もわかりにくく感じられる紙芝居の教育的意味が学生にはつかみにくく考えられる。

表4 紙芝居と絵本の使い分けについての意見

-
- ・人数（紙芝居は大人数、絵本は小人数）や場所の大きさ。（6）
 - ・両方使いこなす。人数やお話によって使い分ける。
 - ・部屋の広さや子どもたちの様子を見て使い分けると良い。
 - ・難しい内容は紙芝居を使う。引き込まれやすいため。
 - ・絵本は基本的にあればどこでも読めるので、ちょっと落ち着かせたい場面で、紙芝居は全員がそろって妙に落ち着いている場面がいいと思う。
 - ・絵本ばかりの物語ではなく、紙芝居の存在を子どもたちに知らせるためにも使いたい。
 - ・ずっと紙芝居より組み合わせたりすることで楽しめると思う。
 - ・紙芝居をしてもらった記憶はあまりありません。しかし、面白いものなので、実習の時にできたらいいな—と思います。
 - ・紙芝居はちょっと特別なときに使った方がいいと思う。
 - ・あまり紙芝居と接していないので、よくわからないが（中略）絵だけのだから教材として絵本を使っても良いのではないかと思います。
-

4. まとめ

今回の調査は、少人数であったため、保育現場での紙芝居活用の実態を把握できたとはいえないが、保育現場の実態を垣間見ることはできた。

紙芝居の「画面をぬく」、「ぬいた画面をさしこむ」、「演じ手と観客が向かい合う」という形式こそが紙芝居の演劇性であり、観る者を魅了する。その形式によって演じ手と観客とのコミュニケー

ションがはかられ、双方の間に共感が生まれるのである。「舞台」を使うことで紙芝居の特性を安定して行うことができ、紙芝居の特性が効果的に引き出されるのである。しかしながら、学生たちが経験した実習先では、紙芝居を演じる基本である舞台の使用がされていないところが多く、立ち位置についても学生は指導されていない。保育者も「舞台」の意味や立ち位置の重要性に気づいていないと考えられる。

また、紙芝居が保育の場で行われる時間帯は、④活動の合間、⑦夕方のお迎え前、⑤昼食やおやつ前後など、子どもを集めていたり落ち着かせたりすることが必要な隙間の時間帯でしかない。芝居がもつ「特別感」や「演劇性」などを子どもが満喫するには、十分とは言えない時間帯である。しかし、学生が保育の場での紙芝居の扱われ方に対して疑問を抱いていないということは、おそらく学生自身が幼児時代に幼稚園や保育所で楽しんだ紙芝居も同様の時間帯で行われていたと考えられる。それでも、紙芝居に「特別感」を持っているということは、日常生活に埋もれながらも紙芝居の印象が強いものであったからである。どのような時間帯であれ、どのような演じられ方であれ、紙芝居そのものに観客を魅了するゆるぎない力があると言える。日常に埋もれた隙間の時間に紙芝居の「特別」な時間があったという記憶ということになる。

学生たちは自分の子ども時代の幸せな紙芝居の思い出や実習中の経験から、紙芝居に対する期待もあった。人数や場面によって紙芝居と絵本の使い分けをすべきと回答する者も多かったが、紙芝居ならではの特徴を効果的にするには、紙芝居の内容や意図についての理解と、基本を踏まえた演じ方を習得する必要である。

紙芝居を保育や教育において効果的に活用するには、形式を活かした紙芝居の特性を引き出すだけでなく、作品そのものの質が問われる必要がある。今回どのような内容の紙芝居が使用されているのかについては、学生の記憶が明確でなかったため調査できていない。年齢や、保育の場面でのような紙芝居が適切であるのか、また紙芝居の特性を生かすような紙芝居とはどのような絵や文章であるのかについても検討の余地がある。絵本は紙芝居と比べて、その手軽さから家庭でも保育の現場でも多く活用されている。絵本も様々あり、紙芝居との一面的な比較は難しいが、双方の違いをとらえながらも、紙芝居の特質が生かせる保育教材としての活用の仕方を考えていきたい。

参考文献

- 阿部明子・上地ちづ子・堀尾青史（1991）. 心をつなぐ紙芝居 童心社
- 鬢櫛久美子・野崎真琴（2009）. 戦時下における紙芝居に関する議論—雑誌『紙芝居』を中心に— 名古屋柳城短期大学研究紀要, 31, 43-55.
- 鬢櫛久美子・野崎真琴（2010a）. 保育現場における紙芝居の活用状況 名古屋柳城短期大学研究紀要, 32, 65-75.
- 鬢櫛久美子・野崎真琴（2010b）. 保育者養成課程における紙芝居—学生のアンケート調査を通して— 名古屋柳城短期大学研究紀要, 32, 77-86.
- 鬢櫛久美子・種市淳子（2005）. 保育におけるメディアとしての紙芝居—紙芝居通史を中心に— 名古屋柳城短期大学研究紀要, 27, 53-67.
- 鬢櫛久美子・種市淳子（2006）. 保育のなかの紙芝居—倉橋惣三と「紙芝居」の関わりを中心に— 名古屋柳

- 城短期大学研究紀要, 28, 95-105.
- 鬢櫛久美子・種市淳子 (2007). 保育のなかの紙芝居—関屋友彦の福音紙芝居活を通して— 名古屋柳城短期大学研究紀要, 29, 1-12.
- 鬢櫛久美子・種市淳子 (2008). 保育のなかの紙芝居—「紙芝居. ネット」の構築とその役割— 名古屋柳城短期大学研究紀要, 30, 91-99.
- 石山幸弘 (2008). 紙芝居文化史 萌文書林
- 上地ちづ子 (1997). 紙芝居の歴史 久山社
- 紙芝居文化の会会報 1号 (2006年6月)～18号 (2011年6月)
- 加太こうじ (2004). 紙芝居昭和史 岩波書店
- まついのりこ (2006). 紙芝居の演じ方 Q&A 童心社
- 右手和子 (1986). 紙芝居のはじまりはじまり 童心社
- 日本保育学会 (1971). 日本幼児保育史 第4巻 フレーベル館
- 下川耿史 (編) (2002). 近代子ども史年表; 明治・大正編, 昭和・平成編 河出書房
- 鈴木常勝 (2005). メディアとしての紙芝居 久山社
- 鈴木常勝 (2007). 紙芝居がやってきた! 河出書房
- 鈴木常勝 (2008). 保育に生かす紙芝居 かもがわ出版
- 鈴木常勝 (2009). 戦争の時代ですよ! 大修館書店
- 昭和館【監修】(2012). 紙芝居の世界 メディアパル
- 山本武利 (2000). 紙芝居 街角のメディア 吉川弘文館

(おおもと ちぐさ: 人間科学科 人間形成専攻 教授)